

小梅はどのようにして『環海異聞』を写し取ったか

志賀裕春氏旧蔵資料の中に『環海異聞』の写本が七冊含まれています。その構成は序例附言一冊、巻一・二及び三・四合冊が各一冊、巻五・六が欠けていて、巻七、巻八が各一冊、巻九・一〇及び一一・一二の合冊がそれぞれ一冊ずつで、欠本があるのが残念ですが計七冊です。

『環海異聞』といえ、『北槎聞略』と並んで江戸時代の漂流物語の代表作の一つですが、内容は寛政五年（一七九三）十一月末に奥州牡鹿郡の石巻港から江戸に向かって出帆した若宮丸が塩屋崎付近で大風にあい、八カ月余りも漂流を続け、アリューシャン列島に漂着したところから始まり、文化元年（一八〇四）九月に長崎港に帰港するまでの、世界周航の一部始終を、仙台藩医であった大槻玄沢（前野良沢）についてオランダ語を修め、のち『蘭学階梯』や『重訂解体新書』を著したこと（有名な蘭方医）が若宮丸の主であった津太夫等から聞き取り調査を行い、いくつかの部に分け、都合一六冊にまとめたものです。本書は文化四年（一八〇七）夏に玄沢から藩主に呈上されたと言われています。江戸の藩邸で聞き取りが開始されたのは長崎帰着後の翌年の文化二年一二月ですが、それから四〇日余りかけて行われたとされています。藩主に呈上するまでに、その校訂に一年以上を費やしたことになります。

さて、『小梅日記』（以下『日記』とします。）の天保八年（一八三七）分の裏表紙に「環海異聞、五月一日昼過より写しかけ、諸用事のいとまにうつせは八月四日までてやうやう終わる、しかし絵の所十ヶ所程残る」という記述があるのを見つかりました。三ヶ月足らずの間で十六冊もあるものを写し終えたということですから、それ以前に天保八年三月九日の記録の中に、「水野公ヨリ本帰シ筆十本たまふ。但くわん海異聞也」との記述もありました。

これはどう考えればよいのでしょうか。水野公といえ、水野忠央であることには間違いありませんが、まだ写し始めてもいないものを水野公に貸していたということになります。この時代には往々にしてこういうことは行われていたのですが、ここでは誰かから借りていたものを又貸ししたとしか考えようがありません。

ただ、同年八月廿七日の部分には「信衛に絵一枚遣ス、環海異聞借ス」という記述があり、嘉永二年九月一二日には「橋本へ環海異聞皆持参ス」という記述がありました。こちらの方はおそらく小梅自身が書写したものを貸し出したものと思われる。

それでは、小梅は誰から借りたものを写し取ったのでしょうか。『日記』を丹念に読んでいくと、嘉永六年（一八五三）六月廿八日の条に「暑気見廻に行。主人。環海異聞の事云。先日よりの約束ゆへ、岡野平大夫殿へ向かへすよし言。」との記述がありました。岡野家は上級武家ですが、岡野平大夫の次男で鈴木家の養子になった鈴木忠大夫は嘉永四年二月に梅所に入門していますし、梅所も岡野平大夫家へは頻繁に出張講義に出かけています。さらに、岡野平大夫は何度も江戸や京都に出向いており、大変な蔵書家でしたから、彼から借りて筆写したであろうことは十分に納得できます。

それにしても、借りていた期間が余りにも長すぎると思われそうですが、当時は借りた書物を筆写するというのが習慣になっていましたし、岡野家との信頼関係もあって、できたものでしょう。

（文責：須山 高明）

漂流民たちは、寛政六年五月からおよそ一年の間、アンドレヤノフスキエ群島のアツカ島に滞在することになりましたが、その間に見聞した事柄や物を大槻玄沢から示されたいくつかの絵を見ながら、ひとつひとつそれらの呼称をロシア語で表現しています。ところが、巻之一に収載されている左の絵図には

コージキの図

コージキハ「コーチイカなるへし」「コーチイカ」ハ此嶋の近海専ら獵するものにて我海アシカの海獺なりと光太夫いへり 故に即チ其真図をここに模セリ

という詞書きがあります。このことは、大槻玄沢が十二年前に露西亜から帰国していた大黒屋光太夫と何度か会って、様々な図を見せてその名前や用途についてアドバイスを受けていたことを示しています。